

## ハジ・ムラート（トルストイ）

ピョートル大帝の時代以來、ロシア帝國は黒海方面への南進を續け、十九世紀中葉、コーカサス山脈一帯を平定すべく、抵抗する回教徒の山嶽民族と熾烈な戦闘を交へてゐた。そんな或日、勇猛な武人として名高いハジ・ムラートがロシア軍の駐屯地に投降して來た。山嶽民族の指導者シャミールの副將として、大膽不敵にして神出鬼没の行動故にロシア軍の脅威となつてゐた彼だつたが、その武勇や人望を恐れたシャミールが殺意を懷いてゐるのを知り、殺される前に辛うじて逃亡したが、愛する家族を連れ出す暇が無かつた。しかも彼は嘗て山嶽民族内の權力闘争ゆゑに父や兄弟や縁者をシャミールに殺されてをり、ロシア軍と戦ふべく手を結んでゐたものの、内心、シャミールを強く憎んでゐたのである。

さういふ次第で、彼はロシア軍の手を借りて家族を救ひ出す事が出来れば、シャミールを打倒する手助けをしようと申出て投降に及んだ譯だが、ロシア軍はシャミール追討に好都合だと

て歓迎する一方、警戒も怠らず、彼が駐屯地の外に出る事を許さなかつた。だが、やがて、文明社會の軟弱や腐敗と無縁な彼の爲人や振舞は少からぬロシア人を驚かせ、魅惑するに至る。ハジ・ムラートは「射抜く」様な鋭い目を持つ一方、「底抜けに善良さうな笑ひ方をするごく素朴な人間」だつたし、「己れの宗教に對する愛着」を隠さず、己が「民族の習慣」や「掟」にも強い誇りを持つてゐた。或時、彼は司令官の舞踏會に連れて行かれて、肌を露にした女達の姿を見るが、後で舞踏會の感想を訊かれてかう答へる。我々の處では女はあの様な服装をしない、我々にはこんな諺がある、「犬が驢馬に肉をご馳走し、驢馬が犬に乾草を振舞つたが、どちらも腹がふくれなかつた」。そして、「にやりと笑つ」て彼は云つた、「どの民族も自分の習慣がいいものです」。

處が、彼が家族を救ひたいとの一心で、夜も眠らず、殆ど何も口にせず祈り続け、屢々司令官に助力を訴へたにも拘らず、ロシア軍は中々行動を起さうとしない。その裡にシャミールが、人質にしてゐる息子の目を抉り妻を陵辱してやると脅迫して來る。ハジ・ムラートは意を決して駐屯地を脱走し家族の救出に赴くが、追跡するロシア軍に包圍され、壯絶にして見事な最期を遂げるのである。

史實に材を採つたトルストイ晩年の作品である。以前、本欄でトルストイの「神父セルギイ」を取上げた時、「戦争と平和」の作中人物の臺詞、「人間の血管から血液を全部抜き去つて、代りに血管を水で一杯にするがいい。さうすれば此の世から戦争は無くなるだらう」を引いたが、ハジ・ムラートこそは生きた血液が五體に漲つてゐる男である。彼ばかりではない。彼がシャミールの許から逃亡して或る部落に潜伏すると、己が命の危険を冒しても盟友たる彼を匿ふのを崇高な義務と信じるサドーがゐて、さういふ自らを嬉しく誇らかに思ひつつ、「きらきら光る目」でハジ・ムラートを見詰め、自分が生きてゐる限り誰にも「指一本差させはしない」と斷言する。ハジ・ムラートは相手の言葉の眞實を確信して云ふ。よし、解つた、お前に「喜びと生命」を與へるとしよう。二人は「喜びと生命」を總身に感じて生き且つ死んでこそ人たる者の生だと信じて疑ふ事がない。そしてさういふ彼らを「民族の習慣」即ち己が文化に對する強烈な誇りが支へてゐる。ヴィトゲンシュタインはこの作品をよく弟子達に薦めたが、彼の云ふ通り、ここには人間について「教へられる事が澤山ある」。「平和惚け」の國民こそが學ばねばならぬ事が澤山ある。